Vol.13

ゆうことみゆきのふくふくトーク

ソンコ deソンコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた本田優子（札幌大学副学長）と村木美幸（アイヌ民族博物館専務理事）が、その魅力をソンコ（＝お便り）形式で語り合います。

イラスト／安田千夏

パイカラ ノンノ（春の花）

4月！我らが「ソンコ deソンコ」も、めでたく2年目の春を迎えました（拍手）！

おめでたい花といえばフクジュソウ。新年を寿ぐ花として鉢植えにして飾られたりするけど、北海道での開花は4月。まだ色彩に乏しい残雪の野山で金色に群れ咲くフクジュソウには、アイヌの人たちも特別な思いを寄せたみたい。たとえば、素晴らしい刀は「フクジュソウの雫から浮き出たような宝刀」と表現されるの。あの輝きは、美しさだけでなく、パワーの象徴でもあるんだね、きっと。

ところで、フクジュソウのことをアイヌ語ではクナウというんだけど、クナウにまつわるかわいそうなお話も残ってるの。

カンナカムイ（雷神＝龍神）が、末娘クナウを貂（テン）に嫁がせることにしました。クナウは貂が大っきらいだったけど、父神に逆らえず承知してしまいました。でも、いざ嫁入りする時になって姿を消してしまったので、貂は血まなこになって探し回り、とうとう草の間に隠れているクナウを見つけ出しました。貂は怒って「草になれ！」と呪いをかけ、クナウはフクジュソウになりました。貂が冬眠している間だけ、クナウは雪の消え間から顔を出し父神のいる天を仰ぐのです。

ね、なんだか切ないお話でしょ。…でもね、このお話は最後のオチ、つまり「だからフクジュソウは残雪の頃に花を咲かせる」ってところが決め手の由来譚なんだけど、たしか貂って冬眠しないよね。だから本当に貂なのかどうか、実はちょっとアヤシイ。

美幸さん、女神が草に変えられて春先だけ顔を出すって話、たしか他にもあったよね？

うん、フキノトウにされた女神の話がいくつも残っているよね。フクジュソウのように切ない話というよりは、人間に悪さをした罰でフキノトウになったという話。

小龍神の娘が妻のある人間の男を好きになったことから、妖術をかけて夫婦の仲を悪くした。夫がわけもなく妻に折檻するので、妻は家出をして、いくあてもないので山に入って木の下で寝ていたら、ムササビの歌う子守歌が聞こえてきた。「これ女よ、お前達の仲を悪くしたのは天上の小龍神の娘だ。早く帰らないと夫をとられてしまうから早く帰りなさい。」それを聞いた妻は急いで家に戻り、神の娘を捕まえて、鎌でずたずたに切り刻んでテイネポクナモシリ（湿った地下の国＝地獄のような所）に落としてやろうとした。すると妻の夢に神の娘が現れて「私が悪かったからどうかテイネポクナモシリにだけは落とさないで下さい。フキノトウでもいいからこの世に残して下さい。」と謝罪してフキノトウになった。

ムササビの子守歌のおかげで女神の横恋慕が失敗に終わってフキノトウになったというお話だけど、この物語で気になったのはムササビの子守歌。人間に知らせるための歌であれば「ムササビの歌が聞こえてきた」という表現だけで良いのに何故「子守歌」だったのか？こんなところに突っ込みを入れてしまいましたが、優子さん、どうして子守歌だったんでしょうね。う～ん、謎だ…。Ⓙ

■本田優子（ほんだゆうこ）：金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸（むらきみゆき）：白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏（やすだちか）：神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。